阪大病院NEWS

No. 76 号

OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL

2019(令和元)年10月25日発行

発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15
TEL／06-6879-5021
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp

禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

ハイブリッド手術室増設

最新の血管撮影装置導入

安全で体に負担少なく

本院は最新の血管撮影装置を備えた「ハイブリッド手術室」を新たに増設して、10月の第2週目から利用を始めました。

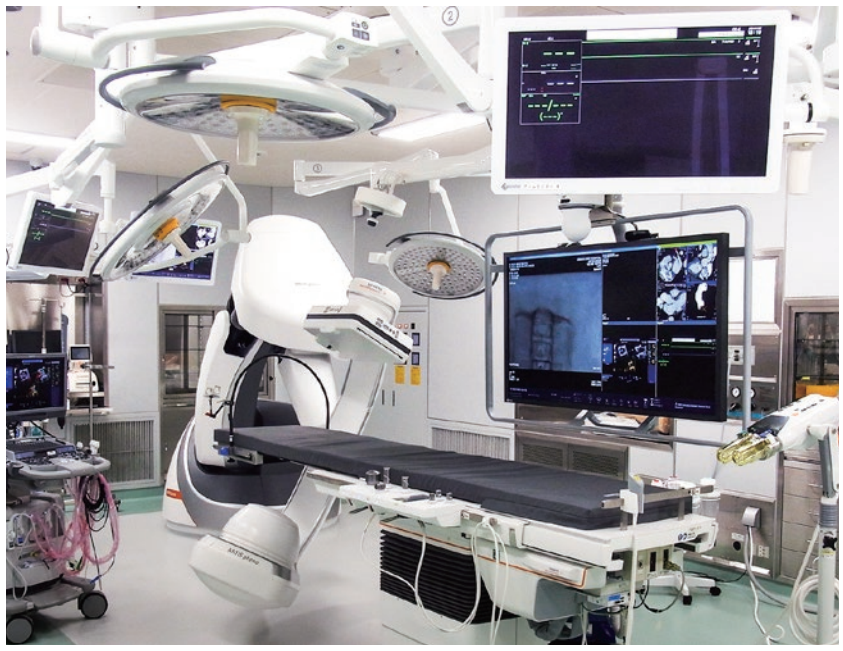
近年の高度化する手術に対応するために、ハイブリッド手術室や、CTやMRIを装備した手術室など、高機能手術室が誕生してきました。

本院手術部では、平成21年4月に7番手術室を改修してハイブリッド手術室を設置しました。粉塵(ふんじん)の少ない清潔な手術室環境において、当時急速に対応の幅が広がった大血管ステントグラフト手術や、カテーテルを使用した心大血管手術の将来性を見越しての改修でした。

その結果、心臓血管外科が、年間約300件ハイブリッド手術室を活用することで、わが国の経カテーテル的大動脈弁留置術(TAVI)の指導的立場を確立しました。最近では、循環器内科も正規の手術室使用科として活用しており、経皮的僧帽弁形成術(MitraClip)などの先進的カテーテル治療を行っています。

10年を経過して、今やハイブリッド手術室は装置の故障等でキャンセルすることが許されない必須のものとなりました。さらに、今後のカテーテル手術治療の発展のためには、更に高機能な装置を充分なスペースを確保して設置することが望まれるようになりました。

そこで今回、従来の2番・3番手術室と手洗いスペースを改装して大きな新3番手術室を設置して、最新の血管撮影装置を導入しました。元の器材庫は明るい色調の手洗いスペースとなっています。より高画質で低レントゲン被曝となり、高性能の心臓血管用超音波画像診断装置も有機的に併用しています。患者さんにも職員にも安全で、高度で体に負担の少ない「低侵襲性治療」を発展させてゆくことに寄与するものと期待されています。



㊤広いスペースを確保して、新たに増設したハイブリッド手術室。高性能の心臓血管用超音波画像診断装置も備えている㊥最新の血管撮影装置㊦左端の「3」と記された扉が新3番手術室。右に明るい色調の手洗いスペースが見える

高校生早期医療体験プログラム

現場の重責学ぶ

写真提供　読売新聞社

心臓血管外科は、医学部を目指す高校生を対象に「早期医療体験プログラム」を実施しました。3年目となる今年は、高校生14名を夏休みの5日間に受け入れました。同プログラムの最大の特徴は、実際の手術現場を見学できることです。手術着に着替えた高校生たちは、「補助人工心臓埋め込み手術」「大動脈瘤(りゅう)手術」など、生死に関わる手術を間近で見学しました。

高校生たちは「外科医はすごい」「これほど集中している人を見たことがない」「瀕死(ひんし)の人をこちらの世界へ引き戻した」と感想を漏らしていました。手術の見学は衝撃的で、医師になる覚悟を新たにする生徒がいる一方で、人命を預かる重責に自分は耐えられるだろうかと自問する参加者もいました。

心臓移植を待つ患者さんや補助人工心臓をつけた患者さんとの交流及びディスカッションも行われ、治療を待つ人に希望を与える医療の大切さを学びました。また、iPS細胞由来の心筋シート研究現場の見学もして、臨床を支える基礎研究の大切さも学びました。

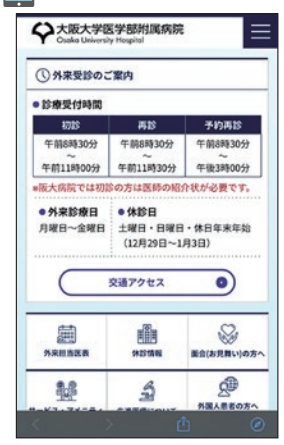
参加者の一人は「医師になる確かな勇気と希望をもらった」と話しており、医師を目指す高校生たちにとって、充実した夏休みとなったことは間違いないようです。

本院HPをリニューアル

スマホにも対応

パソコンで

スマホで



◀こちらのQRコードからお手元のスマホでご覧ください！

本院では、前回のホームページ(HP)リニューアルから約5年が過ぎ、災害時も含めて多くの患者さんが利用されるスマートフォンへの対応が課題となっていました。そこでこのたび、HPをリニューアルし、全体をより見やすくリ・デザインするとともに、スマホへの対応を実施し、7月末より運用を開始しました。

写真㊤がパソコンで閲覧した状態です。今までは、スマホで閲覧しても、パソコンで閲覧する時と同じ画面が小さくなって表示されるため、文字が小さく読みづらくなっていました。リニューアル後は写真㊦のようになりました。情報内容はパソコン閲覧時のまま、スマホの画面サイズにピッタリの状態で、文字も大きくストレスなく表示されます。

これからも、新しくなった本院HPをご活用くださいますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

病院長おすすめ御膳

病院長のおすすめの具材、定番のえびや変わり種のプチトマトをサクッと食感良い天ぷらにしました。旬のとうもろこしを使用した冷たい茶碗蒸しが天ぷらを引き立て、全体的に素材の味が楽しめる上品な味付けに仕上げました。患者さんたちにも好評をいただきました。

メニュー
病院長お好み天ぷら
ちりめんご飯
とうもろこしの冷製茶碗蒸し
お浸し
デザート

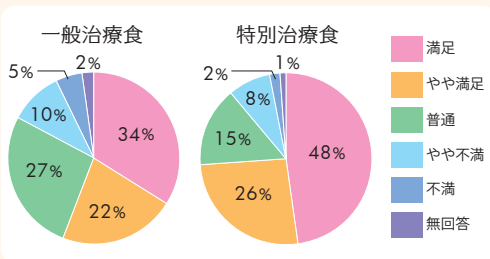
病院食アンケート結果

6月に病院食アンケートを実施しました。食事の満足度を伺った項目では、「満足」「やや満足」「普通」を合わせて、一般治療食83%、特別治療食89%でした。

「改善した方が良いと思われるメニュー」についての問いには、一般・特別治療食ともに、魚料理についてのご意見(臭い、焼き魚の硬さ、小骨の多さ等)を多くいただきました。

一方、うれしい感想では、「家で参考にしたい」「阪大の食事がNo.1」「季節の初物が食べられて幸せ」などの声が寄せられました。今後、調理法や味付けなどを改めて検討し、皆様に喜んでいただける食事提供に取り組んでまいります。

Q 食事の満足度



新診療部門長等紹介

●外科系科診療部門長

土岐(どき) 祐一郎(ゆういちろう)

このたび奥山宏臣教授の後任として外科系科診療部門長を拝命しました。外科系科診療部門は消化器外科Ⅰ、Ⅱ、心臓血管外科、乳腺内分泌外科、呼吸器外科、小児外科及び病理診断科から構成されています。心臓大血管やがん、小児など幅広い疾患に対して外科医の技術で治していくことを基本にしています。更に近年では、内視鏡手術、ロボット支援手術、カテーテル手術と新しい技術がどんどん外科の世界に入ってきています。大学病院として最先端かつ高度な手術を安全に患者さんに提供することをモットーとして診療に邁進してまいります。

（令和元年8月26日就任）

●IVRセンター長

東原(ひがしはら) 大樹(ひろき)

令和元年7月1日付で、IVRセンターのセンター長を拝命しました。IVRセンターでは、画像診断に精通したIVR専門医師・放射線技師・看護師らがチームとなり、血管造影・超音波・CTなどの画像誘導下に経皮的手技を行うInterventional Radiology(IVR)を行っています。主にカテーテルを用いた血管系IVR・経皮的穿刺(せんし)下に行う非血管系IVRの処置を、小児から高齢者まで全身多岐にわたる疾患を対象とし、あらゆる診療科と連携を取り、より低侵襲な診療を行えるように心掛けております。また、夜間・休日にも24時間365日の緊急オンコール対応を行い、本院の診療に貢献したいと考えております。

（令和元年7月1日就任）

傷を修復するエキスパート

外見美しく気持ち健やかに

形成外科

形成外科は、身体に生じた組織の異常や変形、欠損、傷痕などを、さまざまな手法や特殊技術を駆使して機能を回復させ、可能な限り正常に、より美しく修復します。

治療の対象となるのは、先天性では、唇裂口蓋裂、眼瞼下垂症、小耳症、血管腫・血管奇形(動静脈奇形など)といった身体の表面に現れる形の異常や色調異常などで、後天性では、外傷、熱傷、外傷や手術の後に残る傷痕や変形、リンパ浮腫、皮膚腫瘍など)です。

がんを切除した後の傷痕や変形にも積極的な治療を施しており、特に乳がん切除後の乳房再建では、西日本トップクラスの実績を持っています。シリコンを用いた人工物による再建も多く行っておりますが、より自然な仕上がりを期待できる自家組織(皮膚や皮下脂肪)の移植術式に力を入れているのも当科の特色です。また皮膚の血管が異常に増えたり広がったりする血管腫・血管奇形には、外科系診療科と連携した治療を行うほか、がん切除後の四肢のむくみにはリンパ浮腫外来を設けて対応しています。難しいとされるケロイド治療は、傷痕を専門に診るケロイド・瘢痕外来が放射線治療科と連携して良好な成績を上げています。

当科が目標としているのは、一人一人の患者さんの症状に合わせた、より安全で効果の高い治療です。形成外科分野の疾患は生命に直接関わらないものがほとんどですが、体表の異常は精神的なストレスにつながります。機能の回復に加え、外見も美しく修復することで患者さんのＱＯＬ(生活の質)に貢献したいと考えています。

そのためにも、形成外科専門医などの人材育成は重要な課題となります。モニター付き練習用手術顕微鏡などの先進設備を導入することで、多様な治療技術を習得できるシステムを構築し、緻密なトレーニング体制を整備しています。

形成外科は新しい医療分野ですが、日々、技術が進んでいます。傷痕や変形に関する悩みを諦めず、ぜひご相談ください。

技術者と機器 一元管理

適切な人員配置と情報提供

医療技術部

医療技術は日進月歩で進化しており、医療技術者に対しても、より高度で先進的な技術の提供が求められています。当部は現在、国家資格を含む14職種の医療技術職員(現在255名)で構成されています。「検査部門」「放射線部門」「リハビリ部門」「臨床工学部門」の4部門があり、それぞれの医療技術者が24の診療科やセンターなどに派遣されています。

(上)(写真左から)南副部長、藤埜副部長、前田部長、橋田副部長、(下)疾患別の部内研修会の様子

各部門の技術者が効果的に力を発揮できるよう、一元的な管理で適切な人員配置を行っています。一元管理をすることで部門間に横のつながりが生まれます。密接な情報共有が可能となり、エラー予防や患者さんに対するサービスの向上につながっています。

各部門の具体的な業務は次のようになります。検査部門は、患者さんの臨床検査データの精度管理と正確で迅速なデータ提供を担っています。放射線部は、医師・看護師らとのチーム医療のもと精度管理に基づいた信頼できる画像データの提供と放射線治療に取り組んでいます。リハビリ部門は、患者さんの機能回復、ＡＤＬ(日常生活動作)・ＱＯＬ向上を目指して、電子カルテを活用したチームアプローチを展開しています。臨床工学部門は、人工呼吸器や補助循環装置など、生命維持に関わる装置の操作や医療機器の信頼性の維持・向上などに尽力しています。

また、院内の医療機器も一元管理しています。医師・看護師などが安全に正しく医療機器を操作できるよう、新しい機器を導入した際の安全使用研修会などを開催しています。医療機器の取り扱いや精度管理などに関する意識向上にも注力し、機器の保守管理、安全使用のための情報提供も行っています。さらに、疾患別の部内研修会などを実施し、職種間を問わず関係する技術・最新情報に対する見識を深めています。

私たちは医療技術者として、専門知識・技術の修得に励み、医師や看護師、事務職員などと連携しながら、当院をはじめ、地域や日本の医療に貢献したいと考えています。

医療の質・安全の国際学会を主催

会議後 国際チームが本院訪問

第8回レジリエントヘルスケア国際会議及びワークショップが、本院の中央クオリティマネジメント部の主催により、8月25日から28日の4日間、淡路夢舞台国際会議場において開催されました。世界11カ国から111人の参加者があり、医療の質・安全の観点から、患者さん同士のサポート、チーム医療、複雑系科学等について、熱い討議が行われました。

レジリエントヘルスケアとは、医療の質・安全や組織マネジメントへの新しいアプローチであり、チームや組織の総合力によって、刻々と変化する状況に対して柔軟に対応し、良い結果を得ようとする取り組みです。

第8回レジリエントヘルスケア国際会議の参加者(中央は中島和江中央クオリティマネジメント部長)

会議後に、アンドリュー・ジョンソン病院長(オーストラリア)、アレックス・ロス教授(スウェーデン)、タルシジオ・サウリン教授(ブラジル)が、本院の手術部、集中治療部、高度救命救急センター等を見学され、病院職員や大学院生に対して講演をしてくださいました。それぞれの病院での診療体制の強み、医療安全の取り組み、医学教育等に関する活発な意見交換が行われ、大変有意義な一日となりました。

AYA世代の患者交流

がんサロンイベント

8月31日、がん相談支援センター主催による、「ＡＹＡ世代のがん患者さんを支援する講演会、交流会(みんなで考えよう いまのこと あしたのこと)」を開催しました。

生殖医療センター副センター長の瀧内医師、がん看護専門看護師の林看護師に「ＡＹＡ世代のがんと妊孕性について」、ＮＰＯ法人がんノート代表理事の岸田氏に「経験者が伝えたいがんと情報について」をテーマに、それぞれの立場からご講演いただきました。

院内外から患者、家族、医療者、総勢49名が参加し、講師の先生方を交えての意見交換を行い、互いに繋がりを深め、笑顔があふれる交流会となりました。

終了後のアンケートでは、「こういった機会は少ないため、定期的に開催してほしい」との意見も数多くあり、ニーズの高さを実感しました。今後もがん相談支援センターの重点活動として、ＡＹＡ世代のがん患者さんの支援を継続的に実施していきます。

次回の予定

11月19日(火)13:00〜15:00

「がんの治療と仕事の両立について」

場　所

オンコロジーセンター棟５階
キャンサーボードホール

対象者

当院で治療中のがん患者さん及びご家族

ホスピタル ミニ・ニュース

PHOTO TOPICS

高校生1日看護師体験

7/30

高校生５名が病棟で看護師とともに患者さんとの対話や車いす介助、血圧測定などを体験しました。

病院見学会報告

9/19

９月19日、恒例の阪大病院見学会を開催しました。参加者は公募により抽選で選ばれた一般の方々です。集合後、まずは広報評価係による病院の概要説明の後、感染制御部により手洗い実習を含めた感染対策講習を受けました。次に、臨床検査部では最新の機器を使った臨床検査の様子を、病理部ではモニターに拡大投影したがん細胞の様子などを見学し、参加者の方々は興味津々で、たくさんの質問が飛び交っていました。続いて、屋上ヘリポートにて高度救命救急センターによる説明の後、ドクターヘリの見学を行いました。大阪府内でドクターヘリが配備されているのは本院だけです。参加者の方々は、滅多に目にすることができないドクターヘリを前に、目を輝かせて見学されていました。当日は初秋の好天に恵まれ、最後にはドクターヘリの前で集合写真を撮影し、病院見学会を終了しました＝**写真**。

秋のミニコンサート

10/11

大阪大学医学部合奏団による演奏の様子

除染とヘリ搬送を訓練

主要20カ国・地域首脳会議(G20サミット)開催を控えた５月15日、テロ対策として、職員が除染テントを設営し、医師や看護師が防護服を着用して模擬患者を除染する訓練を実施しました＝**写真左**。

また、１週間後の22日には、重量制限等の関係から屋上ヘリポートを利用できない場合に備えて、本学吹田キャンパスのグラウンドにヘリコプターを着陸させ＝**同右**、模擬患者をグラウンドから救急車で搬送し、本院内で高度救命救急センターから手術室へ移送するという訓練を実施しました。

いずれの訓練も本番さながらの緊張感の中で、滞りなく終えることができました。

第1回ＮＩＣＵ同窓会に100名

７月27日、本院にて第１回阪大病院ＮＩＣＵ(新生児集中治療室)同窓会が開催されました。ＮＩＣＵの“卒業生”とご家族合わせて100名以上が参加されました。第１部は写真を使った自己紹介、医師・看護師の近況報告をしました。第２部のグループトークでは、それぞれの思いを分かち合ったり、いろいろな情報を交換したり、パパグループが作られたりして楽しい３時間となりました。世話人となった卒業生のご家族、ボランティアの医師・看護師の皆さまに感謝します。事後アンケートは次回の開催を望む声が多く、全体の満足度は４.６点(５点満点)と高評価でした。次回開催については、小児科外来にて案内させていただきます。ご興味のある皆様はぜひご参加ください。